大子の歴史散歩

第三回

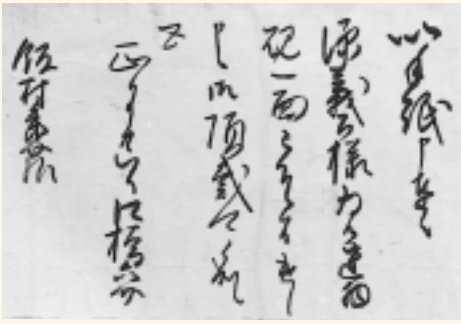
小久慈硯（すずり）（その一）

大子町教育委員会社会教育課　主幹　吉成英文

元禄十三年（一七〇〇年）十二月六日に水戸藩二代藩主光圀公（みつくにこう）は、太田の西山荘（せいざんそう）で死去して義公（ぎこう）と諡（おくりな）された。

翌元禄十四年（一七〇一年）になると側近をはじめ交遊のあった人々へ遺物が形見分けとして配られた。

西山荘に近い久昌寺の僧で、義公に親しく仕えていた日乗上人の日記によると、元禄十四年一月二十七日には、西山荘で直接に義公に仕えていた人たちに形見が配られ、翌二十八日には町付村（現　大子町大字町付）の郷士、飯村武介へも形見分けの「硯」が届けられている。



▲ 飯村武介あて、江橋六介書状
（大字町付　飯村和紀氏所蔵）

以手紙申達候
源義公様為御遺物
硯一面被下候間遣し
申候御頂戴可被成候
以上
正月廿八日　江橋六介
飯村武介様

お手紙にて申し上げます。
義公（光圀公）様の形見として
硯を一面くださるそうですので、
お届けしますから、お受け取りになってください。
以上
一月二十八日　江橋六介
飯村武介様

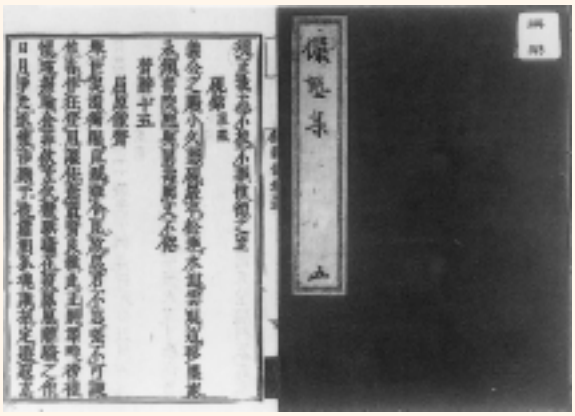
この手紙の差出人、江橋六介は、元禄三年十二月から義公に仕えていたが、義公が西山荘に移ると同時に西山荘で、家事全般を指図する賄頭（まかないがしら）を勤めていた。

これらのことから義公の形見分けは、西山荘において使用していた日常生活用具をはじめ、文房四宝（ぶんぼうしほう、筆・墨・紙・硯）等も配られていたことが明らかである。

その中で特に注目するのは、義公に仕えて太田で家塾を開いていた儼塾（げんじゅく）森尚謙の著書「儼塾集（げんじゅくしゅう）」に大子村小久慈の槐沢（さいかちざわ）で産する小久慈石で彫（ほ）られた硯の記述を見出したことである。

儼塾集（巻五）銘十四
硯銘　家蔵
義公之賜　小久慈硯
巌平松垂　水瀉雲現
近移墨地　永鎮書院
庶興同壽　臨文不倦

この本は元禄十五年の序があり、宝永四年の版行で「小久慈硯」が文献のうえで最初に確認できるものである。



▲ 儼塾集（巻五）　国立国会図書館所蔵

一説では、明国からの渡来僧で水戸の祇園寺（ぎおんじ）の住職だった東皐心越（とうこうしんえつ）が、この小久慈石が硯石として貴重なものであることを発見し、義公に進言したため、義公は藩の御用地として一般の採掘を禁止する御留山にしたという。

その後、この硯石は一時忘れ去られていたが、文化・文政年間ごろから、いわゆる文人墨客の間で次第に関心をもたれるようになった。

例えば、画家の浦上玉堂は会津若松への旅の途中に水戸へ立ち寄り、この硯石を入手しようとして手を尽くしている。また、彰考館総裁を長く勤めた立原翠軒もこの硯を愛用していた。

これは昭和十七年六月に水戸弘道館で開催された「咸章堂岩田健文建碑記念展覧会」に「立原翠軒愛用筆硯・小久慈石自然硯、使用筆一本付き立原善重氏出品」として、出品されたが、昭和二十年八月の水戸空襲で消失してしまい、その破片が立原家に残されている。

内容に関するご意見やご感想及び問い合わせは、社会教育課社会教育係歴史資料室　電話(2)2627までお願いします。